令和4年度　首里城復興基金事業監修会議　第2回【議事概要】

日時：2023 年３月７日（火）14:00～16:15

会場：沖縄県市町村自治会館　４階（第４～６会議室）

1. 令和4年度の監修会議・ワーキング部会の概要【資料1、2】

①確認・承認事項

- 製作・監修方針（案）を承認。

②復元事業のポイントについて

- 前回の監修会議でも述べたが、「伝統技術の継承」は工芸的な要素が主体となっている気がする。今回の製作における伝統技術とは何かを整理する必要がある。龍や獅子の阿吽となった往時の理念についても理解を進める必要がある。
  - 往時の考え方・思想については、今後彫刻 WG 部会でも引き続き検討したい。
  - 伝統技術の他、新たな復元技術を取り入れる点についても十分な議論が必要である。

2. 各ワーキング部会の検討状況【資料3、4、5、6】

①確認・承認事項

- 各 WG 部会における令和４年度の検討内容や次年度に向けた課題を確認。
- 製作体制・技術者（案）について、調整中を含め、当初の製作体制について承認。

②彫刻ワーキング部会について

■共同作業場について

- 製作に県立芸大が携わることを非常に嬉しく思う。ただし共同作業場を大学に整備することについて、教室や教員のスケジュールなど大学の授業上の問題はないか。
  - 共同作業場の設置については現在調整中だが、相当難しいスケジュールであり、早急に検討を進める必要がある。令和５年度中に納品すべきものについては、個々のアトリエで製作することも想定される。また、製作技術者には教員など関係者が多く関わるため、大学の授業に影響がでないことも必須と考える。石膏原型製作に関わる方々も実製作の体制に含めるよう調整しており、連携しながら作業を進めてもらいたい。
  - 共同作業場は、事務局で適地を調整しているところである。

■彫刻ワーキング部会における課題

- 現在、新たな知見に係る検討として大龍柱、小龍柱について議論しているが、二階御差床龍柱の造形にも影響するため、デジタル画像など分析材料の提供をお願いしたい。
  - 現在、田辺泰の『琉球建築』に掲載されている古写真のデジタル画像化を進めている。県立芸大が進める鎌倉芳太郎写真（以下、鎌倉写真）のガラス乾板デジタル化についても、連携して進めたい。
  - 鎌倉写真資料の高精細画像については、本事業で活用可能性のある資料を優先して出力で

きないか整理しているところである。写真全体としてだけでなく改めて接写することで、微妙な彫りなどの精度の高い情報も入手できると思うが、鎌倉写真そのものが文化財なので、どこまで対応できるかも検討した上で、高精細画像を提供したい。

- ➢ 大龍柱、小龍柱の新たな知見の検討においては、既存の写真資料を用いて高精度分析したものなので、新たなデータが出てくるわけではないことは留意いただきたい。また、国事業で大龍柱の遺物残欠の 3D データ化を行っているが、阿形の下部部分の遺物がきちんと接合できることが確認できた。いずれ国からデータも提供されると思う。

- 御差床高欄のしまこ柱についても、鎌倉写真によって形が変わっていることが分かっている。こちらの高精細画像についても早めに提供いただきたい。
  - ➢ その旨も承知している。
- 前回（平成）復元時から一部修正の対象となる高欄親柱上の石獅子や大龍柱についても、引き続き WG で議論していくこととする。

②焼物ワーキング部会について

- 特に意見なし

③染織ワーキング部会について

- 垂飾（瓔珞）の中央に火焔宝珠がある。今回、垂飾文様下絵の修正の検討が位置づけられているが、その考え方について説明いただきたい。
  - ➢ 火炎宝珠の形態は時代とともに変化している。正殿復元年代である「寸法記」が描かれた時期は火焔がもっと下に伸びている傾向にある。ただし、「寸法記」の文様はかなり簡略化されているため、そのまま使用するのではなく、同時代の石碑文様や絵図などの実例をベースに図案を考えていくべきである。
  - ➢ 前回（平成）復元時は「寸法記」だけでは分かりにくいため、唐破風妻飾の火焔宝珠を参照した。例えば、宝珠には上部に線が二本入っているが、こうした表現についてどう考えるか。
  - ➢ 二本線は、通常の火焔宝珠には見られる表現である。
  - ➢ 事務局は、火焔宝珠の事例を収集して、検討できるようにしていだだきたい。
  - ➢ 瓔珞の文様は「寸法記」の火焔宝珠にあわせていくことは承知した。「寸法記」だけでは龍の形も分からなかったので、こちらも唐破風妻飾を応用した経緯がある。
- 糸の色は、赤、黄、青、白、黒とあるが、それでよいのか。
  - ➢ 尚家文書に中国に絹布・糸の調達を指示した記録があり、それによると五色を使用している。
- 龍の上にある雲が切れている。切るのか、切らないのかをこの場で決定できないか。
  - ➢ WG では、空間の広がりを考慮すると切れている方がいいという意見もあった。
  - ➢ 切れることで広がりを出す方法と枠の中に収めるという両方のケースがある。先日の染織 WG 部会でも確定できなかった。WG でもう少し議論すべきだろう。
  - ➢ 染織 WG にて次年度以降も検討することとする。

④瓦類ワーキング部会について

- 瓦当文様の論点（10 頁）に加えてほしい事項がある。瓦当文様は、軒丸瓦は「い」タイプ、軒平瓦は「a」タイプとなっているが、それぞれのタイプにも形式、バリエーションが様々あり、どの遺物を採用するか選定作業が必要となる。資料に掲載されている軒丸瓦の写真は、マンガン釉がかかっている。近年の研究では、昭和修理の際にマンガン釉をかけたという説と近世期にもマンガン釉を使用したという説の両方がある。私は後者と考えているが、その妥当性も議論が必要である。今回復元で参考とする遺物の選定については、国の技術検討委員会で諮るべきかも要検討である。
  - 遺物の選定は必要な作業であるため、国と連携しながら、次の WG や監修会議で議論を詰めていきたい。工期との兼ね合いを含めて国と県と調整する。
  - 瓦は製造に時間がかかるため早めに着手していただきたい。金型は国の技術検討委員会でも確認したい。技術検討委員会においても監修会議での議論は問題提起しておきたい。
- 石嶺クチャの鉄粉除去について、性質上粉砕効率が落ちるのではと考える。クチャを乾燥させるなど、できれば焼失瓦と一緒に処理できないか。工業技術センターと連携して確認してほしい。
  - 赤土と混ぜることを事務局でも検討を進めている。適宜センターと調整する。
- 石灰石が混入しているのは製造工程で気をつければ何とかなる。鬼板（鉄粉）は除去作業をしなければならない。石嶺クチャの全体量は小さいので時間はかかるが除去は可能である。若しくは配合比を変えるか。いくつか実験、検証が必要だろう。
- 瓦は吸水率、温度の規定があるが、製品の水準として歩留まりをどこに持っていくかも重要ではないか。
- 納品検査をどうするかも課題である。前回（平成）復元では葺きながらチェックし、ある意味、全数検査に近い状況だった。
- 鬼瓦を載せる試しも必要だろう。
  - 荷重の問題は、配慮する必要があると考えている。
- 試作瓦の問題点ついては、今後、第２段焼成試験にて対応していくことを確認した。

(3)人材育成・技術継承について【資料７】

①確認・承認事項

- 製作記録の作成方針（案）の承認
- 製作記録の保存・活用に関する考え方（案）の承認

②人材育成・技術継承について

■製作記録の活用について

- 県立博物館・美術館の「手わざ事業」では、最近の若い人は SNS でしか見ないということが話題となった。若い世代を対象とした活用方法も視野に入れる必要がある。
  - 今後、SNS を通じて製作過程を発信することもできるだろう。
- 資料２の２頁に、「県内外の人々の想いを実現（カタチに）する事業であるため、わかりやすい説明資料を作成する」とあるが、例えば、龍柱や獅子等の阿吽の形式が首里城に取り入れられ

ている理由等も整理していく必要がある。ガイド等の一般向けの解説だと、阿吽は雌雄の意味であると説明されたりする。また、龍柱の造形的な意味よりも、向きにしか関心が向かっていない。彫刻物の造形に関する理念を含めた整理が必要である。

- ➢ すべての製作物について、わかりやすい作業も必要になるだろう。ＨＰへの掲載や発信等も含めて、事務局は今後、検討してもらいたい。

■寄付金について

- 寄付金には、首里城復興基金と首里城未来基金の２つあると思うが、現在はどちらに寄付が行われる形となっているのか。
  - ➢ 首里城復興基金の募集を令和３年度で締め切っている。令和４年度からは未来基金にて寄付を募っており、使途としては技術継承と歴史まちづくりに関連するものになっている。技術継承においては、令和５年度から研修を行うことになっている。
- 未来基金はどのくらい集まっているのか。
  - ➢ 現在、約１億８千万程度集まっている。未来基金は今後も継続的に続けて活用していきたい。
  - ➢ 未来基金についても寄付が集まるよう、積極的に情報発信をしてもらいたい。

（4）寄附金を活用した製作物に係る材料調達の進捗について【資料8】

①確認事項

- 与那国島のイベント開催状況の確認
- 木材、石材等の調達状況の確認

②意見等

- 与那国島のイベントでは、伝統芸能である「御木遣（おんきやり）」が 16 年ぶりに復活した。地元の人たちにとって、伝統文化や首里城への愛着を高める機運とするためにも、伝統芸能を復活する機会が必要だと提案してきた。それが実現して非常に嬉しいことである。

以上